

# 白金蔭



SHIROGANE YOSHI



コンバイン地の鷺空の鷺連れて (2025/9/24 手賀沼干拓田)



風船葛の返り花 (10.17) 紅白曼殊沙華 (9.30 将門神社)

どんぐりと言ふ名愛して拾ひけり  
引きとめし人送りゆく十三夜  
草の絮跳ぶや展墓の旅にあり  
ひぐらしや厨に茹でる青きもの

璃子 (穴まどひ平 21)	高志選
〃 ( 〃 )	〃
〃 ( 〃 )	みち選
〃 ( 〃 )	〃

令和 7 年 (2025)

10 月号

1 6 8 号

定例会(11月の兼題…切干、小春)

十一月二十一日(金) アビスタ第五学習室 12 ~ 15

十二月十九日(金) アビスタ第三会議室 12 ~ 15

一月十六(金) アビスタ第三会議室 12 ~ 15

十月句会(25 10 ~ 17 兼題 菊、身に入む) 太字は当日句

光成高志

名月や流るゝ雲を仄紅く

みつばあけび青葉の絡み密にして

コンバイン地の鷺空の鷺連れて

もたもたと身に入む歩き宵の道

修善寺の磴の両脇菊の鉢

遠近きんちに泡立草の黄の割扱

光みち

いつの間に白雲消へて菊日和

身にしむや手摺掴んでポストまで

身にしむや隣の人の大噓

萩トンネル日陰細やか明るけれ

秋の日や鴨の逆立ち繰り返す

踏んづけて毬栗を剥ぐ快ころよし

浅野正美

新しき塔婆供えて菊供ふ

身に入むや施設入所の友ありて

新米の山をならして量りおり

渋皮煮傷つけぬよう栗を剥く

金木犀香りに気づく朝の庭

もう五歳成長祝う七五三

佐々木由紀子

あぜ道に楚々と咲きゐる野菊かな

菊の花壇に咲いて凜として

野の道に香り届ける菊の花

食卓に香り届ける菊の花

野辺に咲く菊の香かほる朝の道

身にしむや友のやさしさ常のこと

山下寿幸

苗木植え大輪の花菊つくり

銀杏実探見つけて虫の声

秋日和手元の刃ナイフ鳥つくり

風庵にバードカービング楽しけれ

身に入みて柿の実下がり西の空

香りする角を曲がれば金木犀

168号選句一覽 ○字は選者の頭文字。富特選

◆名月や流るゝ雲を仄紅く

名月と流れる雲の描写が綺麗だ。仄の表現がとても良い。

苗木植え大輪の花菊つくり

毒<sub>二</sub>あぜ道に楚々と咲いてる野菊かな

秋日和に田んぼの周りを散歩していると楚々と咲いている菊も香りに魅せられた情景がします。

毒<sub>二</sub>新しき塔婆供えて菊供ふ

新しき塔婆に菊を供える。今年故人になられた方の塔婆であろう。

毒<sub>二</sub>いつの間に白雲消へて菊日和

散歩中一休みして空を見上げれば雲一つない菊日和だった風景が見えてきます。

もう五歳成長祝う七五三

毒<sub>二</sub>みつばあけび青葉の絡み密にして

毒<sub>二</sub>銀杏実探見つけて虫の声

菊の花壇に咲いて凛として

毒<sub>二</sub>の園身に入むや施設入所の友ありて

身にしむや手摺掴んでポストまで

香りする角曲がれば金木屋

毒<sub>二</sub>のコンバイン地の鷺空の鷺連れて

秋空に稲刈りするコンバインの後ろに鷺ついてくる様子が目に見えます。

秋日和手元の刃ナイフ鳥つくり

毒<sub>二</sub>野の道に香り届ける菊の花

毒<sub>二</sub>新米の山をならして量りおり

身にしむや隣の人の大嚏

遠近<sub>をこ</sub>ちに泡立草の黄の割拠

毒<sub>二</sub>のもたもとと身に入む歩き宵の道

風庵にバードカービング楽しけり

毒<sub>二</sub>毒食草に香り届ける菊の花

食草に花があればいいのだが今日は香りのする菊を食草に添え皆で囲んで楽しく食事している情景です。

毒<sub>二</sub>の渋皮煮傷つけぬよう栗を剥く

秋の食草にいつも楽しみな栗ご飯。渋皮を剥くのに大変だが煮詰めることで綺麗に皮が剥けた様子。

毒<sub>二</sub>秋トンネル日陰細やか明るけれ

毒<sub>二</sub>踏んづけて毬栗を剥く快し

修善寺の磴の両脇菊の鉢

毒<sub>二</sub>身に入て柿の実下がり西の空

毒<sub>二</sub>の野辺に咲く菊の香かほる朝の道

毒<sub>二</sub>の金木屋香りに気づく朝の庭

我が家の庭を見れば金木屋の香りに気が付き長く眺めている様子。

毒<sub>二</sub>秋の日や鴨の逆立ち繰り返す

毒<sub>二</sub>身にしむや友のやさしさ常のこと

俳窓評論纂

\*<sup>10</sup> 朝日俳壇 戦禍の光 中村草田男の昭和19年

の作。「学兵汝<sub>なれ</sub> 吾が仰ぎ目に息白き」「冬日見詰

めて涙を支ふ下<sub>なれ</sub> 瞼<sub>したまふた</sub>」。草田男が成蹊高校の教え子を戦場に送り出すことになった際の句だ。息白きは冬の季語。写生がこまやかで作者の情の熱さが伝わってくる。

「勇気こそ地の星なれや梅真白」は出陣近き教え子に

示した同年の句。「地の星」とは聖書マタイ伝に載る語。塩は防腐剤として人の世の腐敗墮落を防ぐものという比喻に託し、戦禍でも自暴自棄にならず、勇氣・氣力を持つて生きよという意を暗黙裡に込めている。

梅真白がよく効いている。白梅の凜とした姿は、困難の中でも生きる光明である。地の星が私は長い間分からなかったが、この記事にて了解した。草田男はクリスチャンなのだ。「街の灯の消えハルキウの星月夜」「地下壕に紙飛行機や子らの春」。ウクライナの俳人ウラジオスラバ・シノバさんの句。彼が病氣療養中に知った芭蕉に希望の光を感じ、句を詠み始めた。ロシアの侵攻後は、戦時下で生きる人々の心の襲ひだを伝えようと作句を続ける。暗闇の街の満天の星、地下壕の子どもの姿には生きる強さと一縷いちろの光がある。その言葉が誰かの生きる力、希望の光となることを願い俳人は詠み続けるのだ(俳人市村栄理)。この人病氣療養中に芭蕉を知って希望の光を感じたのだ。私はもう何十年も芭蕉々々と言っていますが、キリストが地の星と世の光を山上の垂訓説教としてのべたのであるが、病人にとつては芭蕉が希望の光、世の光に思えるのだ。

10 朝日俳壇高山れおな選の「古里や誰も居ないが蟬が鳴く」(長岡京市 寺嶋三郎)の句に同感。<sup>8.24</sup>の櫛選の「向日葵が我に語れと立ち並ぶ」(守谷市 久保田洋二)も擬人法だが、同感。同、大串章選「炎天を透析

に通ふいのちあり」(川口市 渡辺栄治)万世遊さんをも思った。

9.7 櫛選「あつけなく昼寝の人となりにけり」(金沢市 岩本卓夫) 83歳の人。この境地も悪くない

の選評。私と同年。<sup>9.21</sup>の高山れおな選「言の葉はみな過去のもの星流る」(上越市 相川澄子)千年前の皿

や茶碗はあくまで保存や鑑賞の対象となる文化財だが、言葉は普通に実用品だ。思えば凄い事。の選評。

言葉は発せられた瞬間過去となりもう今の今ないもの、ぱつと流れ見えなくなる流れ星と同じだという時間軸で把握した

もので、選者の評は的外ししている。<sup>9.28</sup>「音のみの波また

波の去年今年」(澤好摩) 近刊の『澤好摩俳句集成』

(ふらんす堂) 所収の句集未収句。誰も見るここのな

い海面の「波また波」。厳肅な新年の情景を暗澹と、

しかも平易な言葉で描いたこの句は二〇二二年の発表。澤は翌三三年、旅先での転倒のため七十九歳で急

逝した。前衛的な作風で知られる高柳重信の高弟と目

される澤の句は、しばしば伝統的な作品と見紛うよう

でありながら、「自らの俳句の言葉をどこまでも自らの

ものにしようとしての、入念な彫琢」(高山れおな)

が施されている。「春の暮赤し橋桁残りたる」(好摩)。

夕焼けかもしれないが、赤く塗り潰したような「春の

暮」を背景に、朽廃した橋桁が残っている。このうら

悲しい景もまた、澤の心象だったかもしれない。以下

略。以上は岸本尚毅の俳句時評である。澤好摩という俳人は知らなかったが、波の句はいい句だと思う。大晦日の海岸べりで初日等待つ作者の姿が想像できる。次の句の春の暮赤し橋桁は赤が夕焼けの赤と橋桁の赤の両方にかかっている。朽廃した橋桁の評は、橋桁を知らぬものの書きぶりだ。防錆剤を塗られた鉄骨の桁が剥げたりして残っているのだ。

芭蕉の軽み以後 (118)

光成高志

室の八島に詣けいす。同行曾良が曰いわく、「此神は木この花さくや姫の神と申もうして富士一躰いったい也。無戸室うつむろに入て焼給ふちかひのみに、火々出見ほほでみのみこと生れ給ひしより室の八島と申。又煙を読習よみならわし侍はべるもこの謂いわれ也」。将はた、このしろといふ魚うおを禁ず。縁起の旨世に伝ふ事も侍はべりし。

おくのほそ道の最初の歌枕の地が室の八島である。先月では栗橋の関所を越えたところまで書いた。その日の泊りは小山市間々田であった。翌日の二十九日(3.29)は陰暦、陽暦に換算すると5.18に小山の屋敷を右に見て、飯塚に向かつて例幣れいへい使街道を通る道を選んで進んだ。例幣れいへい使街道とは、東照宮に幣帛(はい)はくを奉献するための勅使が通つた道のことを言う。幣帛(はい)はくというのは神前にささげる物を指す。もととは布地を表す言葉で、麻などの織物が貴重品として供えられた。昔からあつた街道ではなく、芭蕉が生まれた頃から京都から幣帛を奉納する勅使(例幣使)がつか

わされその通つた道をこう呼んで敬う(やま)った。誓子先生(八重洲句会に、栃木県から来る遠星集作家がしばしばこの例幣れいへい使街道を使つた句が出て来て私は辟易した覚えがある。曾良日記では小山から喜沢、飯塚、鹿沼、壬生に至る道がこの旧日光例幣れいへい使街道であるが、芭蕉・曾良はこの道を進んだのである。

私はこの辺は歩いたことはないが、会社の友達が駒込から日光まで歩いた紀行文を送つてくれたことがあつた。絢子さんから頂いた『関東の芭蕉』(昭和41)には詳しく書かれてある。小山から思川という川に沿つて北上すると惣社河岸に出て、室の八島が遠望され、上河岸、河岸、下河岸の三つの地名も残っていると。上河岸から乾(北西)の方約五丁(≒109m)ばかりの森の中に室の八島があつて、現在の栃木市惣社町にある大神神社、一名歌枕で有名な室の八島である。曾良の随行日記の記事と一致すると書かれてある。「室の八島に詣けいす」とある。今日では室の八島という地名はあまり知られていないが芭蕉の頃は古来より有名な歌枕の地であつた。その縁起については多種多様であつた。だからこそ芭蕉は敢えて自説は述べず、曾良の言説の引用にとどめ、さらに末尾には「縁起の旨世に伝ふ事も侍し」と書いて、留保されたのであろうか(栗田勇著芭蕉下)。同書ではその縁起を詳しく紹介し

ている。かなり専門的なので、ここでは歌枕となった和歌を紹介するにとどめる。(詞花集、七) いかでかは思ありとも知らすべき室の八島のけぶりならでは―藤原實方。(古今和歌六帖三) 下野や室の八島に立つ煙思ひありとも今日こそは知れ。ともに恋の思いをこめて下野国の歌枕として室の八島を詠んだ歌である。平安時代の源俊賴<sup>としより</sup>、平治の乱で流された信西<sup>しんぜい</sup>の息藤原成範<sup>しげのり</sup>、藤原定家の室の八島を詠んだ歌(省略)もある。当時の歌学書には「むろのやしまとは、下野国の野中に島あり。俗には、むろのや島とぞ云い<sup>ふ</sup>。むろは所名歟<sup>か</sup>。其野中に清水の出る氣の立が、煙に似たる也。是は能因が坤元儀<sup>こんげんぎ</sup>に見えたり」とある。坤元儀<sup>こんげんぎ</sup>というのは能因<sup>のういん</sup>に関連する地名の歌枕のことである。江戸時代の林羅山、貝原益軒等の詩には室の八島大明神の傍の地としている。元禄元年(一六八八)稿の『下野風土記』には次の記事がある。「予此所に至り見るに、八島の明神とて大社あり。社の右に八島と云所あり。島八ツ有て、島ごとにほこらあり。古いにしへは清水湧て煙り立しといふども、今は水かれて、所々に庭たずみの如くのこりて、けむり立事なし」

右の云う事は、室は所の名、八島と云うのは、煙の立っている所だから八島は元来竈<sup>かまど</sup>の事である。

その古名である。室と云うのは、山に囲まれた入江や谷の小盆地を示す。曾良による室の八島についての縁起に帰ると、この神は木花開耶姫の神と言つて、富士の浅間神社と一体でございます。この神が出入り口を塞いだ産室<sup>うぶむろ</sup>に入つて、身を焼いて誓われたそのさ中に火々出見尊<sup>ほほでみのみこと</sup>がお生まれになったので、室の八島と申します。またこの歌枕では煙を詠む約束になっているのもそのためです。またこのしろという魚を食うことを禁ずる社の縁起を、世に伝えてもおります。後世の研究家の中には、次のような感想を持った方も多い。例えば、歌枕巡りを目的とした「奥の細道」の旅をスタートし、最初の歌枕の地なのに、あまり感動していないのがよく分る。「室の八島に詣す」だけで終わり、あとは同行の曾良の蘊蓄を披露しているだけ。最後は唐突にコノシロという魚の話。たぶん期待ハズレだったのだろう(すさまじきものゝ歌枕探訪)のIT記事など。しかし紀行には採用されなかった芭蕉の句が「曾良書留」に残されている。「糸遊に結つきたる煙哉」「入りかゝる日も程々に春のくれ」。二句目の句の原句は「入りかゝる日も糸ゆふの名残かな」である。今西に沈み行く太陽も「糸ゆふの名残」である。うすれゆく陽炎に暮れてゆく春の日の哀愁を詠んだものだ。「鐘つかぬ里は何をか春の暮」。室の八島では、

入相の鐘も聞こえないのに、何をたよりに、暮れゆく春を惜しむのか。「書留」には「入逢の鐘もきこえず春の暮」と同じような句が並んでいる。この四句とも芭蕉はおくのほそ道にとりいれなかった。その理由は既に千住での留別吟に於いて惜春の情けを詳しく書いたので、ここではダブるのをさけたのであろうと山本健吉氏は述べている。いずれものびやかで、ゆく季節への愛惜の情にあふれた句である。どこにも室の八島の旧跡に失望した情けはうかがわれない。むしろ、時節とともに侘び寂びてゆく歌枕への愛おしい心が心にしみてくる。夕陽に沈んでゆく風景の中に、芭蕉はむしろ、ありし日の荘厳な室の八島の風光を想い描いていたのかもしれない。

俳文広場

①橋幸夫が9月に逝去しました。「潮来笠」はどんな歌詞だろうと調べ、そういうことかと納得。潮来には行こう行こうと思いつながら行ったことがあります。ただ最近では便利なもので、Googleのストリートビューで限なく巡って、潮来のイメージは出来上がっています。ところで、この歌詞に出てくる関宿は、潮来のおよそ10km近くの上流で、利根川が江戸川と分岐するところです。江戸時代房総沖は船の難所だったので、北の物資は銚子から利根川を上って関宿まで行って、

関宿からは江戸川を下って江戸に運んでいたそうですから、関宿は昔は相当栄えていた所なのだろうと想像します。それから、関宿といえば鈴木貫太郎の屋敷跡があることも有名です。ただし鈴木貫太郎については「226事件」で軍に襲われ重傷を負うも、命拾いをしてたことくらいは知識しかありませんが、どちらにしても、私にしてはここは車で通るだけの地でした。さて、「潮来笠」の三番で、関宿の地名が出てきます。歌は全体でいえば、潮来の伊太郎というやくざ者がいて、一見薄情そうで、風の吹くまま西東の渡り鳥だが、潮来に気を寄せた娘がいて、旅の途中で田笠の紅緒がちらつく。関宿についたときそっと花を利根川に流す。

「だってよ。あの娘川下」潮来笠と歌う。やくざ者の一面をチラッと歌っています。9月に橋幸夫が逝去したと聞いて、何故か「潮来笠」が気になり、調べもしたので、それ以来私の頭の中で、橋幸夫が何度何度も「潮来笠」を歌います。私は橋幸夫と同世代で、「潮来笠」は私の青春時代下真ん中の歌なのです。歌詞はよく知らなかったけれど、吉永小百合と歌った「いつでも夢を」と共にとても親しみがあります。それにしても、人生の中で沢山のひとの別れを経験し、身内の者であつたり親しくしていた人であつたり、とても寂しくなりますが、芸能人の死は、「ああ、あの

人も死んじやった」程度ですが、橋幸夫の死は、なぜか違う心境です。若い日の仲間が死んだということでしょうか。(10.2 広谷豊史)

② 久しぶりに歩いて畑に行ってきました。草取りをして心地よい汗をかきました。ナス、キュウリ、冬瓜等たくさん収穫出来ました。下校見守りを終え車で迎えに来てくれた主人と合流。畑を耕し葉物野菜の苗を植えてくれました。畑の前の土手沿いの彼岸花が色鮮やかに赤く染まり目を楽しませてくれ疲れた体を癒してくれました。30年以上前になるかな？草ぼうぼうの土手に主人が毎年少しずつ植えていき今に至っています。ハクビシンは落花生の周りをほじくり大きな実を食べているようです。われた殻がちらばっていました。網を掛けましたが効果はどうでしょうか(10.3 朋子)。(私も今年は夏の間は畑に出られなかった。出たらたちまち熱中症になって死んじやっていたでしょうね。九月も残暑がすごいので夕方少しづつ草取りにでて10月になってなんとか終り。畑なんて言うものは草との格闘の場になっています。田圃と空が広いところなので五七五とメモして帰ります。昔祖父が草を刈って背負籠を一杯にして帰り坂の下に置いて、私に担いで上れと言った晩に死んじやったのを思い出し、私もそうなるのではと何回も思った。年九千円の借り畑も来年はできるかどうか覚束なくなってきました(高志)。

③ 故郷風景 鏡山からの道筋に沿って海岸の方に降りて行きますと、浜玉町です。浜玉町から、約3キロ近くの松が茂る「虹の松原」の中を通りすぎると右手に唐津城が見えてきます。唐津と言えば、伊万里焼き、有田焼に次ぐ唐津焼で名が知られています。城下町の昔、遊郭があつた街並みと、黒塀の街並みを詮索しながら進みますと、別名『舞鶴城』唐津城に着きます。唐津城は昭和41年に完成しました。7万石の城です。町中に戻ります、九州3大秋祭り「唐津くんち」の有名な城下町です。近くに住む者、故郷を離れられている人々もこの祭りを皆樂しみに帰省して、同窓会を同時に樂しみにして皆が樂しみます。この祭りのとき、唐津の町に親戚や知人がいれば、みやげに「鯛1匹」を持参したこともありましたが、今はそのような風習はないと聞いております。家々にはその家の奥方が作られ、出された美味しい御馳走が処狭しと、振る舞われます。有名な曳山が「鯛の形」をしました、呉服町の「曳山」だ<sup>やま</sup>と思います。全部で12曳山があります。昔は「曳山」が砂浜を競って走っていましたが、現在は安全を優先して、街中を大勢の人たちが『エイヤー・エイヤー』の曳き声が響き渡ります。唐津の街並みを後ろに、海沿いに進みますと半島の先端に着きます。



「七ツ釜」に着きました。福井県で有名な東尋坊にあります。玄武岩、海から突き出た岩で、幅が約25センチから40センチの巨大に突きでた岩並です。この岩の中に、玄界灘の荒波に削られた大きな穴が7つあり「七ツ釜」、近くの呼子町から観光船で穴の中に入り楽しまれております。片方、海の穴の上には放牧された牛たちが若葉を舐くみ、のんびりとした風景です。呼子町は「イカソーマン」鳥賊の刺身と「朝市」で知られています。朝市には親戚の人たちが、海の幸、サザエ、他魚等を並べておりました。町では春になると、「綱引き」合戦が始まります。綱の太さは約40センチほどありました。太い綱からは細い綱が枝分かれして、皆で引きあいます。浜の人は豊魚・村近くの人々は米の豊作を祈願して綱を引きあいます。呼子を後にすれば、豊臣秀吉が朝鮮征伐に築城した名護屋城があります。当時は自分たちの村々が、豊臣秀吉の陣地にされていたと思います。今も「発掘調査されています」どのような物が発掘されるのか楽しみです。暫くぶりに、故郷を楽しみました。帰路は呼子町から、高速バスに乗り、福岡空港から我が故郷を後にします。今後、皆様の故郷を紹介してください。楽しみにしております。（山下寿幸）（手元にある「俳句の旅」全9巻の9は九州・沖縄である。その中の佐賀県はカラーにて句と写真が

載っている。前から寿幸さんが仰っている虹の松原の写真もある。秋の所には唐津くんちの写真もあり、今回の寿幸さんの故郷風景の文章と合わせて見ると合点がいきます。その本に載っている唐津くんちの一句を紹介いたします。「山車めがけ祭宿より小餅とぶ」（堤劍城）。追伸…<sup>10.19</sup>の朝NHKにて七ツ釜など海中のことが放映された。虹の松原も映った。

④目高の子 一つの間に目高の子が生れていた。庭の日向に置いた陶器鉢の布袋草の根っこより、縮緬雑魚のような目高の子が五六匹出てきた。私の目では屈んで眼鏡を外さなければ見えない。顔を近づけると、水を蹴ってさっと布袋草の中へ逃げる。そっと近づいて見ていると暫くは知らぬ顔して泳いでいる。止まって居る時は、尾鰭を振動させて鳥のホバリングとそっくりである。餌を水面に撒いてやると、餌の下に来て、餌をついついている。口に大きすぎるらしい。指で餌を擦り、小さくして撒いてやる。すると、確かに餌を口にした。この目高の親は、高砂の鶏肉屋さんから貰った。金魚水槽に入れて、玄関ドアの外に置いていたが、段々亡くなって数が減ってきた。これはいけないと、利根町の目をつけていた小川から掬ってきた目高を加えた。それでも死ぬ目高も出てきたので、近所の目高博士の所に飼いを聞きに行き、陶器鉢に入れ日向に移動したのだ。それから一月くらいして目高の子が出てきた。親目高は消えてしまったのに。今は親目高の

大きさに近づいた。餌を腹いっぱい食って、牛の腹のようになっている時もある。両目の白い脛が二つ並んで、良く目立つようになった。以上は20年前のことである。今は南面窓の前の60<sup>リ</sup>の水槽に沢山の目高が泳いでいる。皆、目高博士と言っても家の庭に大きな水槽を幾つも並べて目高を飼って増やしITを通して売ってゐる玄人なのだが、そこで買ったり、病院の売店の前で売ってゐるのを飼って来て知らぬ間に増えたものだ。目高とてわかるのか、餌を撒きに近寄ると角に寄ってくる。本誌を編集する真ん前なので、今は璃子さんのぼつぼちゃんに倣って、めーちゃんメーちゃんと呼んで餌をやる（高志）。

⑤ 蠮螋を飼う 八月も終わる頃、畑で蠮螋をみつけた。大きさに驚いた。前兆15センチもあろうか、単身の蠮螋を買い物籠に入れて持ち帰った鈴虫を飼っていた飼育箱を住処とさせる。衝動的に飼うことにしたので準備ができていな。何を食べるのか、住処の環境の知識もない。子ども用の本によると小さな昆虫を主食とするらしい。蜥蜴、蜂、蝶が頭に浮かんだがどれも私には捕獲は無理なようだ。第一それをかりかり食べている蠮螋の姿を見るのは嫌である。差し当って青草を入れて霧吹で水分を与えた。一週間して蠮螋の様子が少しわかった。高いところが好きなようでしかもい

つも南側の蓋の天井に逆さにしがみついている。ふとした思いつきで台所の炒子を一尾投げてやってみた。二三日すると観念したのか炒子の頭を齧っている。やはり動物性食物が好きなのだ。翌日も翌々日もせいしして突けば動く蠮螋をみてこの辺が生死の境界のように感じて夕方捕えた畑へ放してやった。三角の頭を左右に動かして私を見ている。「監禁してご免なさい」、秋冷を感じる夕べの別れであった。（光みち）（私らの俳句の師は山口誓子であった。誓子先生の蠮螋の句に影響されてこの文が成ったのだと思う。誓子全句集の二ページにわたって蠮螋の句が載っている。中でも「かりかりと蠮螋蜂の兒<sup>かほ</sup>を食む」（凍港昭<sup>7</sup>）は有名。）

⑥ 九月のひとりごと 今年の夏は過去にない程の酷暑となりました。九月に入っても三十五〜六度の気温となると外に出るのも覚悟が必要です。庭や畑の様子が気になるが、日中はとても作業する気になれません。トマトは早々に実を付けなくなり夕方から早朝に水やりを頑張るが追いつかない。庭のさつきの大きな枝の一部が枯れてきた。亡き夫が大切にしてきた木だけに心が痛む。特別にしつかり水を撒くが追いつかなくて焦る。木が水を欲しがっていると思うと自分の喉がひどく乾いているかのように思えてくる。樹木がかわいそうで夜休んでも気になって寝付けない。今まで見て見ぬ振りをしてきたが、畑の草も伸び放題でこちら

も不眠の原因になる。放っておけない！やるしかない！しかし今年もとれたての新鮮な野菜をそこそこ堪能したなあ。好きな胡瓜漬けも食べられた。孫も美味しそうに食べてくれた。この味が忘れられず又来年もせつせと苗を植え肥料をまき支柱を組み楽しみながら育てゝいることだろうな。毎年この繰返しです。（廣本幸恵）

#### お便り広場

光成様いつもありがとうございます。「白金葎」167号25部をお納めいたします。心落ち着けて俳句を詠むような状況になくても好きなら詠むだろうから好きじゃないのかもなどと思っている次第です。次号もよろしくお願い致します。みち様によろしくお伝えください（<sup>9.22</sup>木戸敦子）。敦子さんに一言アドバイス。私なんかサラリーマン時代多忙な仕事の中通勤途中出張時など空白な時間が必ずあるものですから、さあ！作るよと気合を入れて思い出します575とメモしました。今はその時代は終わりそれで暇かと云うと逆に多忙です。だから毎日タタメモしています。季語は無限です。それに会うだけでもうれしい。敦子さん！仕事の中にも句材はありますよ。これ以上書きません（高志）。光成高志様 敏子様 白金葎9月号をお送りくださり有り難うございました。今年の夏は暑さが格別でした。九月いっぱい残暑が続き午後からふらふら状態になりひたすら横になっていました。三度の食事はきちんと食べられるので不思議な気持ちでした。十月に入つてようやく残暑から解

放されたおもいです。（中抜き俳文広場へ）。二人とも市と区の文化祭の準備に追われています。私は折り紙とパッチワークの二刀流です。お体に気をつけて俳句作りを楽しんで下さい。追伸：領収書有難うございました（<sup>10.5</sup>朋子）。おはようございます。猛暑の日々からやつと秋を感じる頃になりました10月の投句いたします。宜しくお願いいたします（<sup>10.13</sup>正美）。少し秋らしくなつて来ました。身体の調子が良くないので毎日ゆつくりしています。仲間が良く気を使ってくれるので助け合いながら感謝で暮らしています。近所で栗をもらったので考えてみました。「やつと来た私の出番栗おどる」「西の空一日終りあかね雲」。白金葎ありがとうございます。むずかしいけど読めば心の糧になります。これからいっぱい心を開き元気で自分の人生を生きたいと思えます。身体に十分気をつけて敏子さん二人でがんばつて下さいませ。乱筆にて（<sup>10.14</sup>幸子）。朝夕はかなり秋らしくなつて参りました。まだ、残暑が続いています。九月号の紙面から光成さんのパワーを頂きお元氣で過ごしのことゝ安心いたしました。私も何とかこの猛暑乗り越えられたように思います。九月号をお送り頂きありがとうございます。白金葎の誌の会員（誌友）に受け入れて下さり拙い文を載せて頂き、感動と感謝で一杯です。どうぞよろしくお願い致します。年令のせいとか文の説明が多く、無駄な言い回しなど長文になつてしまい、言葉を選ばなけれ

ばと自分でも気付いています。色々ご教授下さい。よろしくお願い致します。光成高志様 光みち様（<sup>10.14</sup>幸恵）。いつも白金霞を送り頂きありがとうございます。10月の句会に下記の通り投稿させてもらいます。宜しくお願い致します（<sup>10.10</sup>寿幸）。おはようございます。猛暑の日々からやっと秋を感じる頃になりました10月の投句いたします。宜しくお願いいたします（<sup>10.13</sup>正美）。

# 我孫子日記

	9/19	句会
	9/22	古谷野皮膚科
	10/3	駅前ク（内科）
	10/5	
*	向島百花園	
	10/8	ランチ会
	10/10	
*2	花の丘ゾーン	
	10/17	句会

## \*赤南瓜天井棚にぶら下る

破芭蕉茶笥塚の碑堂々と（みち）  
棚に垂る瓢箪大事紐で吊る（<sup>11</sup>）  
大鉢の鉈豆の蔓どこまでも  
泰山木蓄の立つて紅ほのか  
梅擬赤き小さき実の目立つ  
縞芒大きく撓み赤穂立ち  
萩トンネル入れば涼しきうねりかな  
萩しだれ振袖となり地を撫でる（みち）  
塀の外との高き青芭蕉破やれ芭蕉  
錦木の紅葉始まる一二枚（みち）  
向こふから萩の花びら流れくる（<sup>11</sup>）

萩の花水ありピンクの花筏  
白萩に赤萩交じり咲きゐたり  
吾亦紅足元にあり今気づく

## \*2 香るなり金木犀を一周す

金木犀大木なれば匂ひ壺（みち）  
杜の道歩けばどんと櫛くぬぎ落つ  
秋澄むやどんぐり一つ落つる音（みち）

団栗の櫛くぬぎの帽子立派なり（<sup>11</sup>）  
川鶉のコロニー池の樹木を白くせる

## 編集後記

俳文6人、投句5人、どちらも文芸として面白い。人数も丁度良い。来年の15周年記念号の草稿が近づいて来ました。その時はまたお知らせしますのでご協力をお願い致します。

白金霞 10月号（通巻168号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）郵便振込口座一〇五二〇一四二二一三六一名義シロガネヨシ令和七年9月21日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119我孫子市南新木2-14-17光成方 投句先…メール又はライン印刷製本…喜怒哀楽書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三&<sup>9.14</sup>の白金霞&コンバイン&風船葛&曼殊沙華&璃子さんの句集「穴まどひ」よりの選句